

初回・定期カンファレンスの充実が在院日数、FIM 効率に与える影響

山本悠揮¹⁾，谷口知里¹⁾，貴志太一¹⁾，小林啓晋¹⁾，福井直樹²⁾，有田幹雄³⁾

1) 医療法人スミヤ 角谷リハビリテーション病院 リハビリテーション科

2) 学校法人響和会 和歌山国際厚生学院 理学療法学科

3) 医療法人スミヤ 角谷リハビリテーション病院 循環器内科

キーワード：カンファレンス・在院日数・FIM 効率

はじめに

近年、活動と参加に焦点を当てた質の高いリハビリテーションの提供が推奨され、効果的かつ効率的なチーム医療が求められている。また、回復期病棟における在院日数の短縮も求められ、入院早期からチームとしての目標設定が重要となる。

先行研究では、カンファレンス導入における在院日数短縮の効果などの報告がある、一方FIM 効率との有意な相関はないという報告も見受けられる。

当院では月に1回の定期カンファレンスを実施していたが、内容として近況報告に時間を費やし、進行が遅れて在院日数が長期化するケースもみられた。

そこで本研究は、①入院初日の初回カンファレンス導入②カンファレンスの質の向上を目的に、当院独自のカンファレンスシート導入を行ない、導入前後での在院日数とFIM 効率を比較し、初回・定期カンファレンスの充実が在院日数、FIM 効率に与える影響を検証することとした。

対象

当院回復期病棟入院患者196名とし、平成26年10月1日～平成27年6月30日の期間、当院回復期病棟に入院し退院された76名(脳血管疾患42名、運動器疾患29名、廃用症候群5名)を非導入群、平成27年10月1日～平成28年6月30日の期間、当院回復期病棟に入院し退院された120名(脳血管疾患70名、運動器疾患45名、廃用症候群5名)を導入群とした。急性増悪のために転院・その後の再入院となった患者は除外した。

方法

I. 初回カンファレンス

入院初日に主治医、看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、メディカル・ソーシャルワーカーが共同で患者の

ベッドサイドにて初回評価(動作レベルの確認・共有、病棟安静度の決定、患者・家族からの情報収集等)を行ない、続けて担当間で初回カンファレンスを行うことで、情報共有、目標設定を確認できる場を設けた。

II. カンファレンスシート

患者の全体像を把握しながら、問題点の見落としを少なくするため、FIM の各項目で問題点抽出・短期目標設定を行なえるように作成した。その後、改変しながらPDCA サイクルを基盤とした目標設定を中心としたシートへと移行した。

III. 定期カンファレンス

初回カンファレンスで記入したシートを定期カンファレンスで使用し、短期目標の達成状況を担当チームで評価し合い、反省・考察、再評価、状況に応じた目標設定の修正を的確に行なえるようにした。

評価項目は、各患者の在院日数とFIM 効率を算出し、FIM 効率は、群間比較にMann-Whitney U test を使用し、在院日数は平均値を算出した。なお有意水準は5%未満とした。

説明と同意

本研究はヘルシンキ宣言に基づき、対象者の個人情報の保護に十分に留意し、当院の承認を得て実施した。

結果

FIM 効率は、非導入群 0.36 ± 0.25 、導入群 0.46 ± 0.39 と導入群で有意に高値を示し、0.1 点/日の向上を認めた。(p < 0.05)。(図1)

在院日数は、非導入群平均 82.4 ± 37 日、導入群平均 67.4 ± 33 日となり15日の在院日数短縮を認めた。

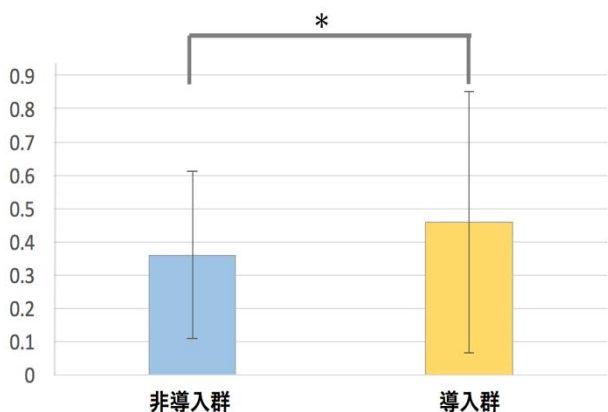


図1 FIM効率

考察

本研究では、初回カンファレンスの導入・カンファレンスシートの作成により、FIM 効率の有意差が認められた。これは、初回カンファレンスを入院初日に多職種で行うことで、超早期に状態把握・共有が可能となったと考えられる。また、カンファレンスを続けて行うことで、患者の動作レベルを確認できることにより、目標設定が明確となり、予後を踏まえた的確なアプローチが可能になったと考えられる。

カンファレンスシートにおいても、チーム目標・各職種での短期目標を明確化・見える化することで、情報の乖離を軽減させ、連携の質を向上させたのではないかと考えられる。

目標設定を明確にし、チームアプローチを行うことで、個別リハビリで獲得した身体機能を、病棟生活で最大限に生かすことが可能となり、効率的なリハビリテーションが行うことができる考える。

これらのことから、FIM 効率の向上に繋がり、在院日数の短縮に繋がったと考えられる。

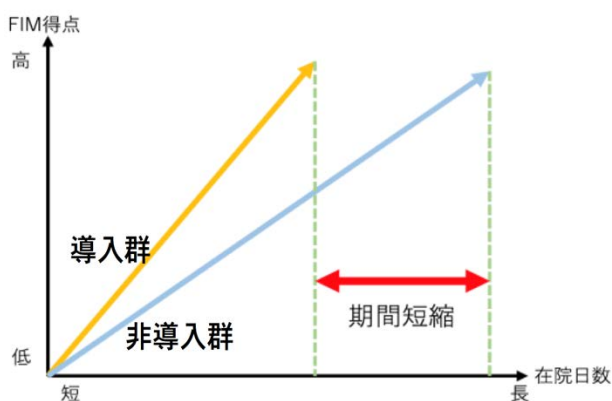


図2 初回カンファレンスの効果 (イメージ)

結語

多職種でのカンファレンスを入院初日から導入し、一貫したカンファレンスシートを使用することで、効果的かつ効率的なリハビリテーション・マネジメントを行うことができた。また、在院日数短縮、FIM 効率向上は、患者・家族にとって、身体的・精神的・経済的負担を軽減することが期待される。

文献

- 1) 西尾大祐・他：回復期リハビリテーション病棟における脳卒中患者の早期在宅復帰を促進するための課題と対策。理学療法学 Vol. 27：297-301, 2012
- 2) 井上直人・他：合同カンファレンスにおける目標設定の効果-在院日数の比較から-。日本理学療法学会大会 2010:pp1464, 2011
- 3) 藤井隆文・他：回復期リハビリテーション病棟における各疾患別の入院時 FIM と入院期間の関係。日本理学療法学会大会 2009:pp3231, 2010
- 4) 西垣有希子・他：脳腫瘍患者に対する包括的チームアプローチの効果-ADL 変化と転帰について-。日本理学療法学会大会 2008:pp2305, 2009